

博士(教育学) 吾妻知美

学位論文題名

看護実践能力を育成するための基礎看護技術教育

—「自然排泄の援助」の教授法に関する研究—

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、看護実践能力を育成するための基礎看護技術の授業プランの作成と検証である。これまでの看護技術教育は、一斉講義による知識の注入と、「安全・安楽・自立の原則」が強調された手順の繰り返しにより学習され、手順の習得までが到達目標であり、知識と技術を統合し、患者に適した看護技術へ応用する経験は、臨地実習に委ねてきた。しかし、近年、看護学生の看護実践能力の低下が看護界の大きな問題となっており、このことを踏まえると、入学早期に開始される基礎看護技術教育から、看護実践能力の育成を目指した教育方法を開発する必要があると考える。

わが国の看護教育は、『保健師助産師看護師学校養成所指定規則』による法的な拘束が長く続いたため、教育課程に対する関心は希薄であり、基礎看護学や基礎看護技術はその位置づけも曖昧なまま現在に至っている。そこで、基礎看護技術の授業プランを検討するにあたり、基礎看護学を「看護実践の全体を見渡すための根幹となる理論、知識、技術とそれらを活用する能力を育成する学問領域」と位置づけた。この前提を踏まえ、看護技術を「患者の<よく生きられる状態>に向けての相互身体的な了解（真のコミュニケーション）に裏づけられた社会的相互作用としての科学性と論理性を内包したアート」と定義した。その上で看護技術の中核となる概念を、F.ナイチングールの示した「看護の本質」（生命力の消耗を最小にするように生活過程を整える）、須田[2004]の示した人間の本質規定（a.人間は自然存在である、b.人間は共同体で生産し、活動する、c.人間は歴史的・社会的存在として自己を形成する）に依拠した「人間の理解」（以後、『看護技術教育における人間の本質』とする）、「看護の価値観・倫理観」と規定した。そして、この『看護技術教育における人間の本質』を教育内容の基軸に据えた「理論」と「技術」が統一された基礎看護技術の授業プランの作成を試みた。また、本論文における授業プランとは、高村[1987]の示した「授業書」の本質に依拠するものである。

実験授業は、2008年、A大学看護学科2年次生82名に対して3回（1回90分）で実施した（授業者は筆者）。授業プランは、看護の本質を理解するために、人間が生きていくために欠かせない「自然排泄の援助」を取り上げた。自然排泄の重要性や排泄の歴史や文化に関してはほとんどの教科書で具体的に触れられていない。そのため、『看護技術教育における人間の本質』に基づいた自然排泄の意義を理解するための教材では、オムツの弊害や排泄物の利用や歴史といった文章教材や、世界の排泄文化に関するイラストを積極的に提示しイメージ化を促した。さらに、対象者の心理を理解するために、床上排泄で使用する便器、尿器やポータブルトイレの排泄音の違いを比較する実験を行なった。『看護技術教育における人間の本質』を理解するための教材の要となる事例は、①理解しやすい人間像で

あること、②健康に関わる生活上の問題が見えやすい状況であること、③問題の解決策を考えやすいこと、④臨床現場に近い状況設定であること、の4点を特徴とした、従来の基礎看護技術の演習にはみられない具体的な人間像を示した。授業の順序構造は、①《看護技術における人間の本質》に基づいた排泄の意義の講義、②一般的な排泄援助の講義と物品の使用のデモンストレーション、③グループワークによる事例に対する援助計画の立案、④グループワークによる発表の準備、⑤援助計画の模擬実演と質疑応答、で実施した。演習においてグループ学習を取り入れることにより、実践的な知識の獲得とアイデンティティの形成を意図した。本授業プランにより学生は、《看護技術における人間の本質》を経験的な実感を通して理解し、さらに実際の看護実践の構造に基づいた援助計画を立案し実践することにより、臨床現場で活用できる看護実践能力の育成につながることを目指した。

授業プランの評価は、①授業過程が授業プランの指示したとおりに進行したかどうか、②授業がプランのねらいを達成したか否か、③学生の授業の歓迎状況、④グループの認識形成および実践能力の達成状況、⑤基礎看護学実習における看護技術の実践能力、の5点から実施した。①から④については授業後の感想文と授業後アンケート、グループワークによる「排尿援助の計画用紙」と模擬実演の様子を分析し評価した。さらに、⑤については、臨地実習における自然排泄の援助の経験状況を確認するため、「基礎看護学看護技術経験録」を分析した。また、授業プランが基礎看護学実習における看護実践にどのような効果をもたらしたかを具体的に知るために2名の学生の「基礎看護学実習記録」を分析した。

①授業過程が授業プランの指示したとおりに進行したかどうか、②授業の認識形成とねらいの達成度では、学生の感想から《看護技術教育における人間の本質》の内容が肯定的に記述されており、ねらいは達成できたと評価できた。③学生の授業の歓迎状況では、授業後アンケートでも9割以上が肯定的意見を記述しており、本授業プランは受け入れられたことが示唆された。④グループの認識形成と実践能力育成については、グループの認識形成では、グループワーク及び発表形式による演習において、学習の深まりを経験していた。《看護技術教育における人間の本質》はグループワークでも共有し、認識形成ができたと評価できた。事例に関しては、「イメージしやすかった」といった記述もあり問題はなかった。⑤基礎看護学実習における看護技術の実践能力では、8割の学生は自然排泄の援助を経験していた。しかし、学生の自己評価には「指導があれば一人でできる」から「見学した」までのばらつきが見られた。看護実践能力は、演習において看護技術の手順の習得度を高めるだけではなく、対象者との相互作用に基づいた経験の積み重ねが必要である。今後は、より現実の看護実践に近い体験が可能な演習を工夫していきたい。また、2名の学生の基礎看護学実習の経験からは、《看護技術教育における人間の本質》に基づいた、対象者との相互作用を重視した看護実践をすることで、患者によりよい変化をもたらし、学生の看護の本質理解への深まりと、看護実践能力の基礎となる能力の育成に寄与することが示唆された。

以上から、本授業プランによって提示される、《看護技術教育における人間の本質》を基軸とした基礎看護学の理論（哲学）と技術が統合された教育内容と、現実の看護実践を反映する教材による看護技術教育の授業プランの開発は、従来の手順の繰り返しとして行なわれてきた看護技術教育を乗り越えるあらたな提案となったと考える。さらに、看護教育における授業評価の方法は確立していない。看護技術教育の授業評価はさらに困難を極める。今後は、授業プランと評価の視点をさらに精選して、看護教育学としての学問の構築にもつなげたいと考える。

学位論文審査の要旨

主査 准教授 大竹政美
副査 教授 大野栄三
副査 教授 木村 純
副査 教授 良村貞子(大学院保健科学研究院)

学位論文題名

看護実践能力を育成するための基礎看護技術教育

- 「自然排泄の援助」の教授法に関する研究 -

本研究は、看護実践能力を育成するための基礎看護技術教育の教授法に関する研究である。具体的な看護技術として、「自然排泄の援助」を取り上げている。自然排泄は、身体の機能を維持するだけでなく、人間の社会生活や個としての感情面においても重要な生活行動である。自然排泄の援助は、看護の本質の理解に基づく臨床判断と倫理的な配慮が求められるにもかかわらず、現在の臨床現場では軽視されがちな看護技術である。本研究では、基礎看護技術教育に関する理論的整理を行なったうえで、「自然排泄の援助」の教育内容を構成し、その教育内容を担った授業プランを作成し、実験授業による評価を試みている。

本研究で高く評価できる点は、次のようにまとめられる。

第一に、基礎看護技術教育の内容に関して有益な提言を行っている。これまでには、看護技術の科学的側面のみが追究され、看護技術とは何かといった哲学的な側面にはほとんど関心が向けられてこなかった。看護技術の教育は、科学的根拠を重視した一斉授業と、演習による手順の実施が中心であり、対象者に看護技術を実施するための一連の過程は臨地実習に依存していた。このような技術の手順的反復にとどまる教育から脱却することを目指して、著者は、教育学における「基礎・基本」の捉え方に依拠して、基礎看護学を「看護実践の全体を見渡すための根幹となる理論、知識、技術とそれらを活用する能力を育成する学問領域」と再定義することにより、基礎看護技術教育に必要な内容は、看護技術に関わる看護の本質・対象の理解・看護の価値観・倫理観といった哲学を含むことが必要であると主張している。

第二に、看護が、看護者がその目的の実現に向かって対象者の人間らしさを追求していく過程であり、おのずと人間と人間の関係を内包することから、著者は、人間の本質（1. 人間は自然存在である、2. 人間は共同体で生産し、活動する、3. 人間は歴史的・社会的存在とし

て自己を形成する）を看護技術教育の基軸としている。

第三に、看護の対象者の理解（人間の本質）を基軸として「自然排泄の援助」の教育内容を構成し、それを具体化した授業プランを、グループごとに援助計画を立案し、模擬実演の形式で発表を行う演習を組み込んだものとして作成している。「自然排泄の援助」は、看護に何が求められ、さらに看護学で何を学ばなければならないのかを初学者が多角的に理解するのに有意義な看護技術であると評価できる。代表的な4点の教科書の記述を分析したうえで、看護技術が、生物体としての身体的な側面だけでなく、社会文化的な背景を持った人間への援助技術であることを強調した独創的な教育内容を設定している。学習者である学生たちが、それまでの生活の中で行ってきた排泄を看護の知識として再構成するとともに、一連の看護の講義で学んできた看護技術の知識を再構成することができるような教育内容となっている。また、授業プランを、実験的な検証により追試可能な客観的な形で提示したことの意義は大きい。

第四に、作成した授業プランを大学一校で実験授業にかけて多角的に評価を行い、授業プランの改訂すべき点を明確に示している。評価の規準を、1. 「授業過程が授業プランの指示したとおりに進行したかどうか」をVTRで撮影した授業記録から評価する、2. 「授業がプランのねらいを達したか否か」を授業後の学生の感想から評価する、3. 「学生の歓迎状況」を授業後のアンケートから評価する、4. 「グループの認識形成および実践能力の達成状況」を「援助計画用紙」と「感想文」の分析と、VTRで撮影した「演習の実際」から評価する、としており、高村泰雄・須田勝彦・大日向輝美らの評価の枠組みを発展させている。さらに、5. 基礎看護学実習での実施状況から「基礎看護学実習における看護技術の実践能力」を評価する、としており、基礎的な相互身体的な了解（対象者との真のコミュニケーション）ができるようになる過程を、実験授業の後に実施された実習の記録から分析している点でも評価できる。

以上のように、本研究は、「自然排泄の援助」の指導過程を実験的に解明し、追試可能な授業プランとして提示しており、基礎看護技術教育の研究および教育方法学的研究として高く評価することができる。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認められる。